

令和 6 年 8 月 6 日

令和 5 年度 特別の教育課程の実施状況等について

宮城県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
気仙沼市立鹿折小学校	気仙沼市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
気仙沼市立鹿折小学校	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/教育課程特例校

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
気仙沼市立鹿折小学校	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/wysiwyg/file/download/1/5282	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/wysiwyg/file/download/1/5282

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

☒ 計画通り実施できている

☐ 一部、計画通り実施できていない

☐ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

☒ 実施している

☐ 実施していない

<特記事項>

保護者及び地域関係者を招いて「海洋フォーラム in 鹿折」を開催し、児童の学びの成果を直接聞いていただき、感想や意見をいただく機会を設定している・

また、特別な教育課程に関する地域連携を促進するために、学校運営協議会において取組状況を提示するとともに、児童の学びに関する地域関係者との連携の強化を協議事項として取り上げている。

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

気仙沼市は震災からの復興そして、持続可能な未来に向けて「海と生きる」をそのキャッチフレーズとし、「海と生きるまち」としての人材育成のために、気仙沼市教育大綱において3つの基本理念「人を思いやる優しさの高い倫理感、豊かな感性」、「自立し創造的に生きていく力」、「郷土に貢献し、世界で活躍するためのグローバルな視点」の3つを定め、理念の実現に必要な力を、F・I・S・H(=Foresight「先を見渡す力」、Insight「本質を見抜く力」、Strategy「道を切り拓く力」、Harmony「つなぐ力」)の4つの観点で整理した。

鹿折小学校では、「海と生きる」気仙沼で生きる子供たちに、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をより良いものにしていくのかという目的を自ら考え出し、その実現に向けて深く考え、実践していく資質・能力を育む教育を目指している。学校教育においてそれらを育成していくためには、従来の教科や総合的な学習の時間における指導だけでは十分とは言えず、教科領域を横断させ、地球規模で起きている問題について、自分とのつながりを通してより探究的に学ぶための特別の領域として、3学年以上に「海と生きる探究活動」を特設し、学習を進めてきた。

教育課程を特別に編成したことにより、教科領域で指導するねらいや内容等の関連と系統をより明確にすることが可能となり、教科等の枠を超えたつながりある学びを展開できている。さらに、「海と生きる」気仙沼の海洋教育で目指す子供像と、その根底にある人間像・社会像を確認し共有していくための一つとして気仙沼市教育委員会示した「海洋リテラシーfor 気仙沼」に示された姿を教育の中で意識しながら実践することで、児童の探究的な学びの方向性や内容が、より自分事となり、本校として目指している「自分の生き方」「地域の在り方」につながる学びに近づいている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

鹿折小学校では、市全体で取り組んでいる標準学力調査における経年変化をみると、各学年の国語、算数における学年平均得点率が少しずつ高まっており、「海と生きる探究活動」の設置により、各教科で目指す資質・能力についても、相乗的な向上を図ることについて成果が見られてきた。また、全国学力・学習状況調査の児童質問で、「将来の夢や希望をもつこと」「困った人がいたら進んで助けること」「人の役に立つこと」「地

域や社会をよくするために何かしてみたいと思うこと」について、県・全国と比較して肯定的な回答が多いなど、他者理解や社会貢献についての意識の高まりが見られる。

一方で、上述したような標準学力調査の結果についての上昇傾向はあるものの、算数科においては全国平均を大きく下回る学年も複数あり、基礎的・基本的な知識・技能の定着のための指導と学習の必要感を実感させ、学習に向かう意識や意欲を高めることが課題となっている。

4. 課題の改善のための取組の方向性

3に示す課題を踏まえ、教科の学習内容の習得・活用にもつながる探究学習になるように改善することが必要と考えられる。

そのためには、「海と生きる探究活動」の探究的な学びの特性を生かし、児童が自らの強い関心をもって調べるという「自分事」となる探究課題設定を重視し、「もっと調べたくなる」、「多くの人に伝えたくなる」、「分かってもらえるように表したくなる」ように、単元づくりを行うことが必要である。

また、その学習過程の中に、教科学習を融合させて学習したり、関連付けて意図的に配置したりしながら、教科の学習の必要性和活用することのよさを実感させる取組を重視した単元構成をさらに工夫・改善していくことも必要である。

さらに、これまでは防災に関する学習を、教育課程の特例として編成した「海と生きる探究活動」とは別に総合的な学習の時間で扱っていたが、「海と生きるまち」としての資質・能力の向上については、防災についての学びも大きな要素となることから、「海と生きる探究活動」に融合させ、一体的な学びとすることも必要であると考えられる。